

「腫瘍内視鏡学」という書名からは、内視鏡検査の対象になるすべての腫瘍の診断・治療を網羅した書物を想像するかもしれない。しかし本書の内容は少し異なる。編集者の長廻は序論で、本書の目的についておよそ次のように書いている。

『内視鏡はどこへでも入っていき何でも見つけて、必要とあれば退治するといった時代になった。内視鏡のゴールとして治療が重視されるようになると、病変の範囲・深さ・所属リンパ節転移などまで、より細かく正確に診断する必要が生じる。内視鏡の進歩の到達点を示して、最新の機器の性能を最大限に生かす努力の拠りどころとして欲しい。そして読者のなかからさらに先へ内視鏡の地平を広げるひとの出現を目的としている。本書は網羅本ではない。「一を聞いて十を知る」よすがとされることを求めるものである。』

本書は「食道・咽頭」「胃・十二指腸」「大腸・小腸」「胆・膵」の4章よりなり、各章ごとに「内視鏡診断・治療の到達点と展望」と題した総論があって、それに続いて下咽頭癌、Barrett 腺癌、食道表在癌、微小胃癌、スキルス、MALTOMA, GIST (gastrointestinal stromal tumor), colitic cancer, IPMT (intraductal papillary - mucinous tumor) などの、たびたび学会でシンポ・パネルが開催され専門誌の特集号の主題になっている事項を中心に、30項目が57名の専門家により分担して執筆されている。

下咽頭・食道では拡大観察による上皮乳頭内毛細管ループ(IPCL)の診断的意義が中心になっている。内視鏡的粘膜切除術(EMR)の適応からはずれる表在食道治療癌の展望として、chemo-radiation 治療(CRT)の手技と目覚ましい成績・安全性についてかなり詳しく述べられているのは、著者らが述べるごとく、食道癌の治療法の選択に内科医も積極的にかかわらねばならぬ時代の時宜を得ている。

胃・十二指腸では超微小胃癌のきれいな症例が印

象深い。早期胃癌やリンパ腫の診断において拡大観察や超音波内視鏡の意義について著者らは懐疑的な様子で、スキルス胃癌の早期診断についての目新しい記述はない。また内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)について著者らの国立がんセンター中央病院のデータが率直に記述されていて、非常に参考になる。

大腸で pit pattern についての記述が少ないのは、これがすでに周知の知見であるためであろう。内視鏡医の共通の悩みである微小腺腫の取り扱いと、1,000 μ m 以上の sm 浸潤癌の診断および EMR をしてしまった場合については、執筆者らのデータを示して詳述されている。colitic cancer の項で著者の多田は持続する炎症で粘膜表面が修飾されているために通常の大腸癌の pit pattern と異なると述べているが、胃癌の場合に当てはめると、大半が胃炎粘膜に発生する胃癌の拡大観察には細血管像などそれとは異なる視点が求められる理由がわかる。小腸では、カプセル内視鏡などの新しい手技の現状が紹介されている。

胆・膵領域では IPMT, 膵嚢胞性疾患、腔内超音波検査(IDUS)などのきれいな写真が掲載されているが、紙数が限られているので、この領域の診断・治療のさまざまなモダリティの紹介に止まっているのは致し方なからう。

言うまでもなく腫瘍性疾患は内視鏡の診断・治療で最重要である。内視鏡を用いた診療に従事しているものが、各領域について今日の内視鏡の到達点を確認できる手頃な書物である。あわせて臓器による内視鏡像などの異同を見比べることができる利便性があり、他では得られない示唆がある。しかしコンパクトに集約された内容であるので、それなりの予備知識がないと読みこなせないかもしれない。

(B5判 264頁 定価12,600円(本体12,000円+税5%))
(2004年 医学書院 刊)